

地域特産種量産放流技術開発事業 (あわび類種苗大量斃死要因調査)

勢村 均・若林英人

要 約

1. メガイの量産状況

1) 初期餌料の違いによる成長および生残率の差違とその後の生残率の推移

幼生を付着させる前に波板に繁殖した付着珪藻の種類と、アワビ稚貝の生残、成長に関連は見られなかった。但し、今回の結果は、同一群を経時的に追跡していないので、双方の関連を見出すためには、今後同一群の特定の板に限って詳細に観察する必要がある。

2) 量産時の成長と生残

稚貝の成長は、日令200日目で平均殻長13～15mmと、昨年同時期に比べて劣った。また、中間育成に移行した後の生残率も80.4%と昨年に比べて低かった。この原因は、冬期水温が昨年に比べて1～2℃低く、稚貝の活力が低下したためと考えられた。疾病の可能性は極めて低いと考えられた。

2. クロおよびメガイの無病稚貝の生産と感染試験

鹿島浅海分場で生産された両種の稚貝は、生残率および組織学的検査により、無病であることが確認された。この稚貝に栽培センター由来と京都府立海洋センター由来のクロ病貝の濾液を筋肉注射して、感染試験を行なったが感染させることは出来なかった。

* 詳細は、平成8年度地域特産種量産放流技術開発事業報告書（あわび類種苗大量斃死要因調査）を参照のこと。